描画体験から考えるバウムテストの実の解釈の理論的基礎づけと教示（1）：実の描画体験と諸テキストの解釈仮説

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥田, 亮 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/2000142

描画体験から考えるバウムテストの実の解釈の理論的基礎づけと教示（1）

－実の描画体験と諸テキストの解釈仮説－

奥田　　亮

臨床心理学専攻教授・カウンセリングセンター相談員

要約

本研究の目的は，バウムテストにおける実の描画の解釈仮説を描画体験過程から基礎づけ，その妥当さを過去の諸研究によって確認し，さらに実を巡る論考からバウムテストにおいて実を描くことの意味合いと教示の問題に関する考察を行うことである。本論文ではこの研究の前半部分について報告された。バウムテストの実の描画体験の過程を，実の大きさ，個数や密度，写実性や記号性・個別性，種類，枝に付くか否か，落ちた実，等の観点から記述した結果，実を描くことに含まれる体験として，①欲求・願望の感覚，満たしたさの感覚・空虚さの回避，②自己誇示・自己呈示・装飾感，③成果・産出感，個人的な思い入れ，④個別性，自分の一部でありながら自分でない個体感，等が省察された。そしてバウムテストの諸テキストの解釈仮説を概観して大きく 3 群にまとめ，①～④の実の描画体験と照合してその関連性を検討して，解釈仮説の根拠づけを示した。

キーワード：バウムテスト，実，描画体験，解釈仮説

Ⅰ　問題・目的・方法

1. はじめに

本稿は，バウムテストの解釈仮説の理論的な基礎づけを，描画時の体験過程に基づいて行うという一連の研究（奥田，2005b；奥田，2019a；奥田，2020；奥田，2022 等）のひとつとして位置づけられるものである。これまでバウムテストで描かれる木（以下バウムと略す）の幹，幹先端処理，枝・包冠線，根や地面について検討してきた。今回は実を描くことについて論考を行っていきたい。

2. 研究の基本的な問題意識と目的

一連の研究の問題意識については，各論文でこれまでも度々論じてきた。そこでここでは，できるだけ重複は避けつつも，それらに加えてさらに別の観点からバウムテストの解釈に関する問題について述べておく。

まず，バウムテストの解釈を（特に初学者において）しばしば困難にさせるのは，解釈仮説の多義性，あるいは“リスト化”された複数の解釈とその選択であろう。バウムテストの解釈テキストにはバウムの様々な指標として，複数の“意味”（本来はそれらはあくまで解釈仮説であるが，テキストの読み手には指標の“意味”が書かれていると感じやすい）が記されており，バウムテストを解釈しようとする際に，初めのうちは一覧のように並んでいるうちのどの解釈・意味を選べばよいか分からない，という戸惑いが生じる。そのようなことが起こる理由の一つは，解釈仮説の根拠（基礎づけているもの）の分かりにくさにある，という考えが，一連の研究の発端の一つとしてある（奥田，2005a）。分かりにくいと言っても，

根拠が全く示されていないという訳ではない。バウムテストの解釈の原典とも言える Koch（1957/2010）では，バウムの解釈が樹木の象徴性（樹木神話や様々な伝承・文化によるものも含む），筆跡学，空間象徴，発達的または知的・社会的に異なる集団に関する統計的データと幾つかの実験結果，そして様々な事例によって，根拠づけられていることが伺える。

けれども Koch は指標としてバウムの部位やその特徴に関する“意味”の記述をリスト的に記しているため，バウムテストに習熟するまでは実際に解釈を行う時に，あたかも夢占い辞典で夢の意味を調べるかのように，その意味リストから適当そうなものを選ぶということが起こる。Stora（1975/2011）でも，バウムの特徴をサインと捉えて，膨大な統計的データと検定結果（資料として記載されている）に基づき，その“意味”を多く並べているのであるが，最終的にはリスト化された解釈がどのようにしてもたらされているか判然としないところがある。

このことを次のように喩えてみたい。仮に宇宙人が地球上に降り立って，人間の行動や反応を観察したところ，地球の人々の心理と行動等との連関が分からないゆえ，それらがどのような意味を持つかを理解するための解釈本を作ったとする。その解釈本を携えて新たに地球を訪れた宇宙人が，ある地球人の両目から大量の水分が生じている（涙を流している）という現象を目撃し，早速解釈本でその意味を調べてみたところ，そこには『①その個体は“悲しみ”という内的状態にある，②その個体には“強い喜び”や“感動”という情動が生じている，③その個体はタマネギを切っているか切っていた可能性がある，云々…』と記されていた。これを読んで新参の宇宙人は大変戸惑うであろう。①と②はおおよそ対極的な意味内容であるし，③は①・②と全く関連性がない。目前の人間が目から水を流していることの意味が，リスト化された①〜③あるいは他のどれに当てはまるのか，その解釈本のリストを見るだけでは分からないし，そもそもそれらがリストに同列に並んでいること自体を奇異に感じるのではないだろうか。なぜそうなるかと言えば，宇宙人は涙を流すに至る体験を理解していないからであるし，また涙が流れるに至る機序を理解していないからである。このことをバウムテストの解釈になぞらえて再度述べれば，バウムテストの解釈テキストにおいて指標の意味リストを眺めるだけでは実際のバウムの解釈が難しいのは，なぜそのような指標が挙げられるに到ったかという仕組みや体験的な理解がし難いから，ということになる。もし宇宙人が，悲しみに暮れて涙を流したり，嬉しくて感激のあまり涙がこぼしたりするまでのプロセスを体験し理解することができれば，単に涙だけではなくそれに伴う文脈や涙に伴う各種の反応（表情や言動）を感じ取って，涙の意味を解釈すること，あるいは悲しみの涙でもそこに悔しさが混じることや怒りを含むこと等の微妙なニュアンスさえ，感じ取って理解することが可能となるであろう。

ロールシャッハ・テストにおいて，Schachtel（1966/1975）は同様の指摘をしている。以下にやや長くなるがその内容を引用する。「或るスコアやスコアの組み合わせは，被検者の人格の或る種の異常，傾向，態度や欠点などを意味することが多い，といった単純な知見でもって，或る程度テスト結果を解釈することはできるが，このやり方は，なぜ或るスコアが或る事柄を意味し，指示するのか，ということを理解した上での方法ではない，という意味において盲目のままにとどまっている。」「徴候と，経験的にそれと一緒に見出される状況との関連を理解していなければ，表面的には同一の徴候が異なった状態を指示している場合，それを判別することができない。」「（スコアの意味づけについて）いかに多く妥当性を検討したところで，現にテストや解釈中に生じていることの理解にとって代わることは不可能である。」「教師や書物などの権威者から教わった，スコアや徴標の固定的な意味づけに頼ると（中略），一見安全に思えるから，初心者にとってはもちろん，エキスパートにとっても魅力的である。しかしこのようなことをしていれば，現に目の前にある反

応に，その意味が当てはまるかどうかを検討しなければならない場合，非常に困難になってくる。」「（テストで使われる）教科書的な用語の理解が皮相的であるために，時には使っている本人自身にも意味がよくわかっていないことさえ考えられる」（以上，Schachtel，1966/1975，p. 6-7）。これらの記述は，バウムテスト（あるいは描画テスト）が扱われている状況にも非常によく当てはまる。こういったことから本研究を含む一連の研究では，筆者自身が様々なバウム作品を模写し，そのバウムを描画していくプロセスの中で起こる体験を内観・言語化して，それらがバウムテストの諸指標とどのようにつながっているのか論考を行うことで，バウムの解釈仮説に描画時の体験に基づいた理論的な根拠・理解のための奥行きをもたらすような基礎づけを行おうと試みているのである。

3. バウムテストの先行研究について

日本ではバウムテストに関する調査研究が膨大にあるが，それが実際に解釈に応用されることは多くない。またその中で，バウムテストの諸テキストの解釈が批判的に検討されることは少ない。例えば，バウムテストと個人特性を測定するような尺度との関連性の研究，あるいは一定の診断基準に基づいて選ばれた何らかの精神病理を有する調査対象者に見られるバウムの特徴についての研究などで，なぜそのような関連性や傾向・特徴がみられたかを考察する際には，しばしば「Kochによれば〜」とテキストに基づいてその結果を解釈し，結果の妥当性を示そうとすることが見られる。あるいは事例研究などで，面接経過の中でバウムが描かれた際にも，テキストの解釈をそのまま援用して，描画者（クライエント）の心理的傾向や状態について述べられることもよくある。すなわち，バウムテストを用いて行われてきた研究では，そこで何らかの知見を得た際に，それを諸テキストに基づいて理解しようとしている。そこには，諸テキストの解釈が正しい，という前提が当然のようにあるように思われる。もちろん，それらの研究の目的自体がバウムテスト（の解釈仮説）の研究でなく，バウムテストを研究の道具・手段として用いているならば，結果をテキストの解釈に基づいて理解するということは間違いではない。しかし少なくともバウムテストそのものやその解釈について研究を行おうとしているならば（それは描画者の何らかの特性や病理とバウムテストの特徴の関連を検討する研究であっても），テキストの解釈を揺るがぬものとして絶対視するのではなく，より批判的に検討する姿勢を持ってもいいのではないだろうか。

そのように述べていながら，本研究を含む一連の研究でも，バウムテストの描画体験と諸テキストの解釈仮説との関連性を検討する中で，その解釈仮説を基本的に正しいものとして扱ってきた。だが一連の研究を進める中で，例えばバウムの根や地面の描画体験を考察し，また日本における発達的研究データとも照らし合わせたとき，必ずしも諸テキストで述べられていないような特徴（例えば幹の下端の処理，根と地面の融合のさせ方等と，青年期における第二の分離-個体化との関連性など）も見られたりした（奥田，2022）。バウムテストの研究をより発展させていくならば，このように新たに考えられる知見をさらに積極的に検討し，これまでの解釈を再考することを進めても良いのだと考えられる。

バウムテストの解釈について，テキスト（特に海外の）を当然の前提にしないことの別の理由として，文化的な側面に関する問題もある。Koch（1957/2010）では，バウムについてヨーロッパ圏を中心とした文化的背景を基にした象徴性から考えられており[1]，文化を超えた普遍的な象徴性を想定するとしても，それをそのまま日本で適用するには難があるように感じることが少なくない。解釈の基盤となる感覚が日本にいる我々に些少であるなら，その解釈をそのまま用いてもピンとこないことになる。こういった側面も，解釈の根拠づけ（象徴性）の記述がテキストの読み手にとって実感を持って理解しづらくなることにつながっていると思われる[2]。

4. 実の描画と教示についての問題

バウムテストにおける実の描画について検討し

ていく上で，教示を巡る問題も考慮にいれなければならない。Koch の原法では einen Obstbaum（果物の木，果樹）を描くという教示であったのを，「実のなる木」を描くように教示する（以下「実」教示と呼ぶ）か，単に「木」を描くように教示するか（以下「木」教示と呼ぶ）については，多くの研究者によって様々な見解や問題の指摘，異なる教示が生じるに至った経緯と論考，調査，教示の提言がなされている（例えば阿部，2013；石井・藤元，2017；小海，2020；中島，2016 等）。教示が統一されることが望ましいとされながらも，結局諸研究や臨床現場においては依然として両方の教示が人によってまちまちに混在して用いられており，「木」教示の場合はバウムテストではなく「樹木画テスト」と呼んで区別されてもいる（高橋・高橋，2010 等）。中島（2016）の調査報告を見ると，少なくとも 2000 年以前までは「実」教示の方が多く用いられているようだが，その後の文献や諸研究を見ると「木」教示の方が妥当だとする論が増えているように思われる。これまでの研究で筆者が幹や枝・根などの描画体験を検討した際には，さほど両教示を区別せずに検討してきたものの，実の描画体験を考える場合には，「実」教示と「木」教示によって描画者が実を描くことへの姿勢が異なってくると考えられることから，二つの教示を区別し，それぞれの描画体験の違いについても考えるべきであろう。そこで本研究では「実」教示を基本に検討を進めた上で[3]，「実のなる」を教示に加えない「木」教示についても考察を行う。そしてそこからバウムテストにおける教示の問題についても取り上げてみたい。

5. 研究の方法

これまでの研究（奥田，2019a；奥田，2020）と同様に，本研究でも以下のような方法で，バウムテストにおける実の描画の体験過程に基づく解釈仮説の基礎づけの論考を行う。

①まず数多くのバウム作品（今回は中村（2017）による 108 枚のバウム作品集を用いた）について，その描かれたバウムを追体験的になぞり模写し，その描画過程で生じる体験を一つずつ内省・省察し，記述（メモ）していく。本研究では特に実に焦点を当てて，これを行う。集積された実の描画体験の内省（メモ）をまとめ，実の描画過程に沿いつつ，その体験（解釈仮説の基礎となる描画体験）について論じる。

②バウムテストの代表的なテキスト（Koch，Bolander，Stora，高橋・高橋）の実の様々な解釈仮説を概観してまとめ，①の描画体験と照らし合わせ，描画体験にそれらの解釈仮説を基礎づけるような関連性が見られるかについて検討する。

③日本におけるバウムテストの先行研究の中で，実に関して何らかの知見につながるようなデータや事象に言及している報告（論文・文献）を取り上げてまとめ，①の省察や②の解釈仮説の妥当さをどの程度支持していると考えられるか，検討する。

④以上を通じて，バウムテストにおける実の描画の解釈仮説を描画体験過程から基礎づけ，それを過去の諸研究によって裏付ける。そしてさらに実を巡る論考の作業から，バウムテストにおいて実を描くことの意味合いと教示に関する考察を行う。

論文としての紙幅の都合上，①・②については本稿で，③・④については後編として別稿の『描画体験から考えるバウムテストの実の解釈の理論的基礎づけと教示（2）』（以下，続報（2）と略す）で報告する。

ところで，例えば①の描画体験の内省報告を筆者自身が行うという方法は，そこで報告される内容が筆者個人の主観に拠ることになり，研究としてかなり特殊であると言えるであろう。より客観性を求めるならば，複数名の第三者に描画体験の内省と記述を求める調査を行い，それを分析するような研究を採る方がより適切かもしれない。しかし，バウムテストに限らず，様々な描画を行う時に生じる体験（そこで生じる感覚や心の動き）を一定の深い水準で言語化することは，その内省行為の経験を相応に積んでいなければかなり難しいと思われる。そのため，その経験のほとんどな

い調査対象者に内省を求めても，その報告から本研究でねらいとするデータを得ることがなかなかできない。筆者はかつて約４ヶ月間にわたってほぼ毎日バウムを１枚描いてはその描画時に生じる体験を綴る，という研究を行った経験を有しており（奥田，2019b），その点で描画時に生じる体験の記述にかなり慣れているというメリットが大きくある。報告される内省が筆者の一個人の傾向の影響を含むとしても，そこには一定程度の普遍的な体験が含まれているであろうし，何よりまずは描画体験に基づいて解釈仮説を検討していく試みを行い，バウム研究と議論の土台を構築・提供するということを考えた時，このような方法の方が利点が多いと判断された。研究の客観性を補償する意味でも，多数の先行研究に照らし合わせて論考を検討しており（上記③），今後は様々な研究者によって本論の内容がさらに批判的に検討され，描画体験の考察が追加され展開していくことが期待される。

Ⅱ　実を描く体験の省察

ここからは研究の方法①で述べたように，バウムテストにおいて実を描いていく過程に沿って，その体験と省察されたことを述べていく。この前段階として，バウムの少なくとも幹と包冠線ないしは枝が描かれていることを仮定して（図１），そこに実を描いていくというプロセスを考える[4]。

図１　実を描く段階

1. 実の位置

幹と包冠線や枝が描かれたとして，そこに実を描くことになると，まず樹冠部の（場合によっては樹冠外の）どこに実を描くかという，実を描く位置が最初に生じるテーマとなる。だが，描画時の体験を内省する中では，実をどの位置から描き始めるか，ということに関しては，さほど強い意味合いが感じられなかった。もしかしたら，樹冠の比較的外周部に実を配置させた場合と，より幹に近く描く場合で，幾らか描画者に異なった感覚が生じているかもしれない〜前者はより外界や外面への意識が強調されており，後者は自らにとっての実という意識が強いなど〜が，最初に描かれた実の位置のみでそれを仮定するのはやや行き過ぎであるように思われた。実の描画が進む中で，複数の実が樹冠部のどこかに偏って配置されていくならば，そこでその体験を検討すべきであろう。よって，実の描画プロセスにおいては，基本的に次に述べる「実の大きさ」が，最初に注目する体験となる。

2. 実の大きさ

一つ目の実の描画が開始される時点で「どのぐらいの大きさで実を描くか」が，描画者にとって焦点（対処する課題）となる（図２）。多くの場合，その判断はあまり意識されていないかもしれない。しかし様々なバウムを模写してなぞっていくと，実の大小によって描画体験が異なるように感じられた。特に実を大きく描く時には，「このぐらい大きく欲しい」「でっかいのがいい」といった欲求・願望や貪欲さ・野心の表現感が筆者の内面に賦活された。また，「こんなにすごいんだぞ」「どうだ大きいだろう」等のアピール感，自己誇示・呈示感，あるいは装飾感覚が生じているように思われることもあった（図３）[5]。

これらを感じるのは，実がそもそも食物であり，

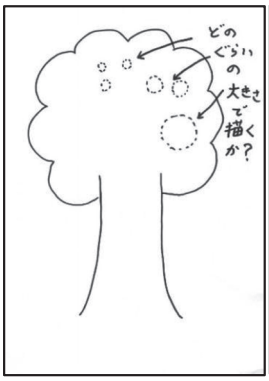

図２　実の大きさのテーマ

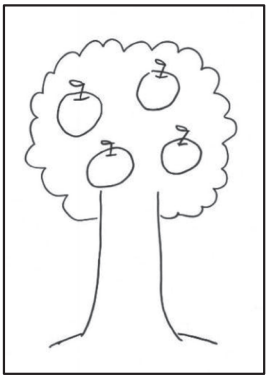

図３　大きい実

欲求の対象物となりえるものであることや生産物としての価値を有するもの，果実として樹木において目を引きアピールするものであるからだと考えられる。そういった実の持つ意味合い・イメージが，大きく実を描くことによって描画者にそのイメージに沿った体験を引き起こしやすくさせるのであろう。

バウム全体が小さいと実は大きく描かなくとも本体にとって相対的に大きいものになりやすいが（図 4），その場合と標準サイズのバウムに「大きく実を描く」体験とは異なる。そのバウムにとって，というよりはやはり実自体を大きく描くことに，上記の感覚が付与されやすいと思われる。ただし，実が大きいか適度かという区別は難しく，同じサイズの実であっても，その大きさの捉え方には個人差がある程度生じるであろう。実の大きさの解釈が難しく感じられる一因である。

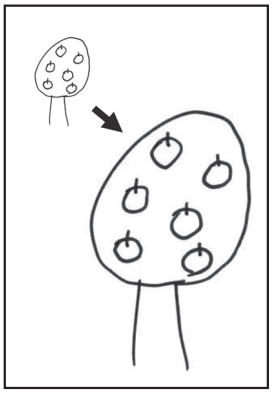

図 4　小さいバウムでは実が相対的に大きくなる

3. 実の個数・密度

実を一つ描いて，二つ目，三つ目を描く…という段階で，「実をいくつ描くか」が次に浮上するテーマとなる。そして実の多寡だけでなく，樹冠部内での疎密の程度やバランス（配置）の意識も，実の描画時に起こり得る（その際には，実の大きさも影響する）。それは継時的（増やしていく）体験であり，どこまで増やすか・止めるかがテーマになる（図 5）。バウムによっては，実を多く描いていく中で，「たくさんできた（成した）」「いっぱい get した！」といった獲得感が起こることがあった。だがそれ以上に，実の個数や配置を巡る体験として，「どのぐらい/どこに描くと良い感じに見えるだろう」といった，見た目を繕う・体裁を整える感覚がしばしば体験された。その対他者優位な意識は，大きい実を描く時に生じ

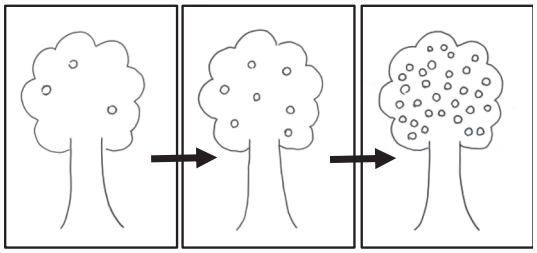

図 5　実の個数（密度）をどこまで増やすか/止めるか

ることのあった誇示感とはまた別の，自己を飾る・デコレーションする・盛りつける感覚が含まれるように思われた。そして，かなり多くの実が描かれたバウムを模写していくと，実を描くことに義務感（「まだ描かないと/樹冠内を埋めないといけない」ような作業・仕事をせざるを得ない気持ち）や，その実に形式的な図柄・模様的感覚が起こることもあった。さらに樹冠を実で埋めて充たす描画をなぞると，「満たしたい」欲求や空虚さの回避感（より即自的である）がイメージされた（図 5 の右のバウム）。

逆に実が少なく疎な場合，何がしか（描画者の所有するリソースや能力のようなもの）を持っていない・乏しさ・ささやかさの感覚があるように思われた（図 5 の左）。実が一個だけとなると，その実にメッセージ性・意図が込められていることが感じられた（図 6）が，それは侘しさのようなこともあれば，その実に懸ける思いが伝わってくる（その思いの内容は模写するだけでは明確に理解することはできないが，描画者の個人史において何らかの重要な事柄なのであろうと感じさせる）こともあった。

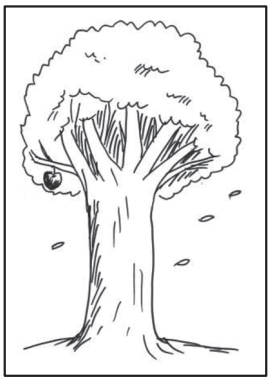

図 6　実が一個のバウム

以上，実が描かれていく体験過程を，その大きさ・個数・配置といった観点から述べた。次に，もう少し実の具体的な描かれ方に関して，その描

画体験に触れてみる。

4-1. 実の写実性・記号性

実は，写実的にも記号的にも描かれ得る。実が多く描かれる場合に生じがちであると指摘した，柄・模様状で記号的な描写は，描くというよりスタンプをポンポン押していく感覚に近く，実に対してまさに「内実」を感じにくいため，リアリティのない形だけの飾り・埋め感が強くなる。そこには外見的・物量的に結果を示そう，あるいは満たそうとするような志向性のようなものが体験された（図 7）。

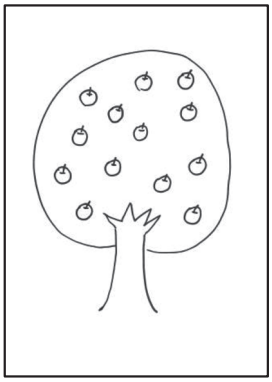

図 7　記号的な感覚の実

一方，写実性の高い，あるいは果肉感のある実を模写すると，そこに味わいや juicy な感じ，より質を伴う欲求が感じられ，プリッと生み出されたような実の産出感や手を懸けた（描き込んだ）育み感も伴うことが多かった。実りの感覚，成熟感（自分自身というよりも自らが成したことに対しての）や充実感，あるいはそれらを希求する感覚の体験であるように思われた（図 8）。写実性の高さは，実を描き出すことへのコミットメントと関連しているであろうから，自ずと実が生み出されるような体験性や symbolic な意味合いが強まるのであろう。

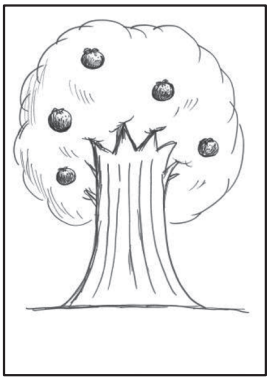

図 8　写実的な実

前節で，実が一個のみ描かれる場合には，侘しさや実に懸ける思いの感覚があることを述べたが，実の写実性が高まるほど後者のような思い入れの体験がより強いように思われた。すなわち，実の大きさや個数に写実性や記号性等の要素が絡み合うことで，その描画体験の過程がさらに一定の意味合い・イメージを帯びてくると考えられる。

4-2. 実の個別性

実はバウムの他の部位に比べて，しっかりと輪郭を持つ具体性を持った個体として描くことが容易であると言える。例えば包冠線は本来はっきりとした形態を持つものではなく（現実の樹木において樹冠部は葉や枝の集合体であって，その外輪郭は複雑で定まらず，描画としてのバウムでも包冠線や茂みの表現は曖昧に途切れてよく描かれる），枝は樹冠内で描かれないことや不連続で部分的な枝・一線枝として描かれたりすることもある。それに対して実は，しっかりとした形を備えて，すなわちはっきりとした「個」として描かれやすいし，また描きやすい。

そもそも実は種子をその中に含んでおり，樹木にとって別株の素となる存在である。すなわちバウム本体の一部でありながら，別の個体の可能性を秘めた部位でもある。このような，自らの一部を成しつつ半ば異体でもある実の象徴性と，それを描く際のバウムにおける輪郭線の明瞭さ（個別性の強調）を容易にする描画上の特質が，ここまで実の描画体験過程として述べてきた「欲求・願望」感（未だ自分のものではないが，自分が所有していることが思い描かれている）や誇示・装飾のようなある種のペルソナ感（自分の持つある側面を対外的に見せるように幾らか加工する営み）につながるのかもしれない。

5. 実の種類

今回模写を行ったバウムでは，リンゴやミカン，あるいは何の実か不明なものまでさまざまな実があったが，実の種類そのものによる描画体験の差異はあまり感じられなかった。リンゴなどのようにバウムテストでの描画がメジャーな実ではなく，描かれることが比較的稀な実の種類は描画者にとっての文化・地域的な意味合いや過去の経験にまつわる何かがあるのかもしれないが，それは描画体験からは推察し難い。ただ模写する中で，多種類の実やクリスマスツリーの玩具等を実として描いたバウム作品が幾つかあり，それらをなぞって描

く際には，ワクワクするような楽しみ・娯楽の感覚，プレゼントや宝物感（そこには既に幾つかの実の特徴にまつわる描画体験で起こった「欲しいもの」感，すなわち欲求や願望と「楽しみ/楽しませ・喜ばせたい」ような装飾感が包含されていると言える）が想起された（図 9）。

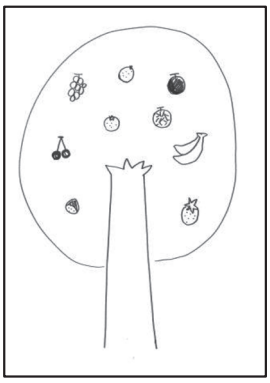

図 9　様々な種類の実

6. 枝に付くか否か

木に枝が描かれている場合，枝から実を成らせることができる。そうやって枝に実を付けるように描いていくと，バウム本体（自己）と実（上記の諸感覚）を結わえ・リンクさせ・自己に属させ・安定させる感覚があった。描画プロセスとして，枝を伸ばしながら実をつけると，より「実になった」「産み出した」という結実・成果感が生じるように思われた（図 10）。かといって，枝と結びついていないからしっかりとした成果とのつながりが感じられていないと言えるわけではなく，包冠線が描かれる中で樹冠部に実が描かれれば，実に託される何かをそこに有していることは感じられた。

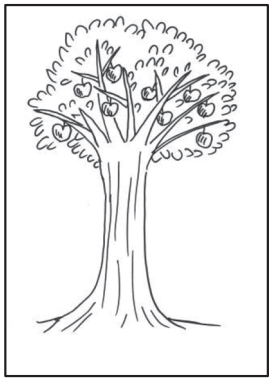

図 10　枝に付く実

7. 落ちた実

落ちた実を描いていく中では，「落ちてしまった」というある種の感傷もなくはないが，それは「落ちた実」「落下している実」が喪失感等を意味する，という既存の解釈仮説を知っていることによる影響のようにも思われた。中には地面上に散らばった実を描くことで，収穫できる状態（期待ではなく現実に手に入る）だと感じられるバウムの描画体験もあった（図 11）。

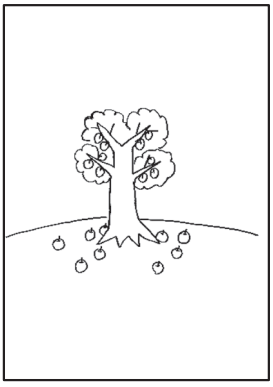

図 11　落ちた実

8. 実の描画体験のまとめと実をつけないことについて

ここまでの実の描画体験の内省の記述は，おおよそ以下のようにまとめられるであろう[6]。

①欲求・願望の感覚，満たしたさの感覚・空虚さの回避
②自己誇示・自己呈示・装飾感（時に義務感を伴う）
③成果・産出感，個人的な思い入れ
④個別性，自分の一部でありながら自分でない個体感

これらは概念的にも体験的にも互いに連関し合っており，時に区別し難く混じり合うこともある。またこれらは前述のように，総じて現実に実が備えている特質やイメージでもあり，描画する中でそういったイメージ体験が感じられてくるだけのことにも思えてくる。だがしかし，自らのバウムのイメージに描画者がアクセスし，それを表現して描き出しているが故に，このような体験が起こることも強調しておきたい。

そして「実」教示であえて実をつけないバウムを描く描画者には，上記の感覚がバウムイメージを思い描く際に賦活されにくいのだと考えられる。もう少し体験的な表現にするなら，バウムを描くプロセスの中で実がイメージされない時には，実に投映されるような何かを「実らせる」思いや「実った」感覚，あるいは「実らせる」だけのリソースが感じられにくいのではないだろうか。そこには広い意味での「実り感」のなさ・表現され難さがあると思われるのである。このことは，「実のなる木を描いてください」という教示が，描画者に「実りのある木」のイメージを問いかけていることを，改めて実感させるものである。この点については，本稿の続報（2）で教示の問題

と併せて詳しく論じる。

Ⅲ　解釈テキストにおける実の解釈仮説

次に，バウムテストの解釈でよく用いられる基礎的な解釈テキストにおける実の解釈仮説を概観する。ここで用いる基礎的な解釈テキストは，Koch（1957/2010），Stora（1975/2011），Bolander（1977/1999），高橋・高橋（2010）である。このうち，Bolander と高橋らは樹木画テスト，すなわち「木」教示である。また Stora も教示に「実のなる」を入れていない。さらに Koch の報告では 14 歳以上で実の出現率が 10％前後程度とされており，これは日本での「木」教示の実の出現率と近い（これらに関する詳細は続報（2）で紹介・検討する）。その意味では，ここで用いるテキストはいずれも実の出現率が低い中で述べられている実の解釈仮説である。そのため，「実」教示で描かれたバウムを仮定して実の描画体験を考察した前節の内容と，以下の諸テキストとを照らし合わせることには，幾分齟齬がある可能性をここで指摘しておく。

1. Koch による実の解釈仮説

Koch（1957/2010）では実について，特にりんごの実に関する象徴性を諸文献から論じた後，そのイメージとして①出来上がったもの・結果，最後のもの・目標，②栄養，利用できるもの・食べられるもの・嬉しいもの・役立つもの，③手で掴める（すぐ使える）もの・現実，④外観と味で人目を惹く・食欲をそそる，等を挙げ，成長と豊饒の結果であり，繁殖の種を宿すもの，としている。ただその解釈は子どもから青年までと成人では異なると考え，前者ではすぐに結果を求めて待てないこと，有用性や結果から判断すること，短絡思考で近視眼的な現実主義（朝三暮四）で高い報酬を求め，外見や目新しさに飛びつき見かけに影響されやすいことを示す，と記している。しかし「成熟した人が実を描く場合（中略），実は実際の成熟を意味する」（p. 261）という（同じ意味の繰り返しで奇妙な表現であるが，成人では実は成熟を示す，という趣旨であろう）。このように子どもや青年が実を描いた場合には，より実を否定的（即時の欲求充足と外見への囚われ）に解釈している。

年齢により解釈が異なることは，「落下中の，あるいは落下した実，葉，枝」の記述にも見られる。ここでは落ちることを「離れている＝分離」と捉え，離れ緩み・気が逸れること，安易に発言すること（すぐ離す＝話す）[7]，また「人に譲ること」「プレゼントとして贈ること」という。それが成熟した人の場合は，分離は喪失，断念・放棄したもの，捧げたもの・贈ったもの，「死と再生」等とされ，感傷的なニュアンスが強くなる。

「大きすぎる実」は「外面のもの，目に見えるものを非常に重視する人」（p. 262）との関連性が仄めかされているが，年齢が上の場合は「空中の実」と共に早期型の指標とされており，いずれも児童期が終わるころにはほとんどみられなくなるため，これを描くことは情緒的遅滞，退行，軽度発達遅滞に与するという。ただし日本では，「空中の実」は大学生でもしばしば見られることが指摘されている（中島，2016）。そして，幼児においては，枝につながっていなくても空中に実を留め置くことで実があると見立てる能力がある，すなわち一定の発達水準にあるという指標にもなるという。

2. Stora による実の解釈仮説

Stora（1975/2011）では，まず実という表現を使っておらず，「樹冠の丸」と称している。これは「Stora は描画後の質問をしないため，「果実」であるかどうか分からない」（阿部，2013，p. 23）からである。Stora の提唱するバウムテストの解釈はサインアプローチであるので，実（樹冠に描かれた丸）そのものについての意味合いや解釈仮説は述べられていない。バウムで「樹冠に多くの丸が描かれている」というサインが見られる（実が多く描かれている）と，①愛情欲求が強い，②感情面で影響されやすい，③口唇期的欲求，④口唇や皮膚感覚の欲求が強い，⑤プロの歌手，⑥食べ物や飲み物に対する強い関心，⑦ゲームが好きで子どもっぽい態度，子どもの遊びが好

き，⑧例外的に競馬や賭け事などのような大人の遊びに関心が強い場合もある，とされている。あるいは「樹冠の丸が落下している」サインは「現実的な状況に対して失望し，それを引きずる」(p. 31）ことと解釈されるという。

3. Bolander による実の解釈仮説

Bolander（1977／1999）では特に「葉のある果樹」（葉や包冠線で描かれた樹冠内に実があるバウム）においては，「果実」が創造的な結果や達成感に関連するとされている。女性の場合では，実は子どもや子どもへの態度を示し，ベリーのような房の実の場合，装飾的な意味合いとなって，楽しいことへの期待や自慢・自己誇示に結び付く称賛欲求を伴った自分の業績の過大評価を示すという。実が落ちることや腐ることは，それらを失うこと（意味を失った業績や流産）と解釈される。他にも実の描かれ方に関して様々な解釈が示されているが，基本的にはいずれも実の解釈を「結果」「達成」（業績などの意味合いも含む），そして女性では「子ども」等を象徴していると考えているようである。

4. 高橋・高橋による実の解釈仮説

高橋・高橋（2010）は実の解釈として，①創造的活動が実を結ぶであろうという自信，②何かを達成したという肯定的感情や自己の誇示，あるいは描画の他のサインとの関係によっては③幼児的な依存欲求，④感情的に拒否された経験を表す，としている。そして Bolander 同様に女性の被検者では果実が子どもを象徴し，⑤子どもを持ちたいという欲求や子どもへの関心を表す，という。また「実の落ちる木」は感受性，自己犠牲，敗北感，あきらめ，女性なら子どもの独立や流産を示すとしている。

5. 諸テキストによる実の解釈仮説のまとめと描画体験

以上を総合すると，実の解釈仮説は

ⓐ結果（を得ること），達成感やそれを得られる自信，報酬，目標／(幼児的・口唇期的な，あるいは愛情）欲求・すぐ手に入れること／子ども（を持つ欲求)〜これらはおおよそ，自分が何かを生み出すこと・それを求めることに関わる解釈の一群である

ⓑ外見で判断したり重視したりすること，装飾

ⓒ能力や結果の誇示，称賛への欲求（ⓐとⓑが組み合わさった意味合い）

といったカテゴリにおおよそまとめられると考えられる。またそれ以外に「栄養，利用できるもの」(Koch)，「プロの歌手」「遊び好き」（Stora)，「感情的に拒否された経験」（高橋）等といった解釈仮説もある。

落ちる・落ちた実については，基本的に様々な「喪失」を示すという解釈が共通しているが，Koch のみ子どもでは多様な意味（気の緩み，感受性，プレゼント，など）を示すとしている。

これらの解釈仮説群を，本稿のⅡの 8. で述べた実の描画体験をまとめた内容と照らし合わせて検討してみると，解釈仮説群のⓐの「結果」や「目標」等には，実の描画体験の③成果や①欲求の感覚が関連していると考えられるであろう。ⓐのうちの「子ども」という解釈は，実の描画による③「産出感」や④「個別性」の体験・イメージとつながっていると思われる。解釈仮説群のⓑ「外見による判断や重視」「装飾」には，実の個数やバランスなどに関わる描画体験として述べた②装飾感が，ⓒの「能力や結果の誇示」は実を大きく描く感覚などで見られた②自己誇示・自己呈示感，あるいは③成果・産出感などが，その解釈仮説のベースとなっているのではないだろうか。問題部分で述べたように，バウムテストの解釈を行う際には，様々な実の解釈仮説を記号的・観念的なまま捉えるのではなく，各々の実の描かれようから論考してきた実の描画体験のいずれかがマッチするか（もしどれもしっくりこないなら，他にどのような体験や感覚がありそうか）を，描かれたバウムをなぞり吟味することで，解釈の確からしさとリアリティが生じると考えられる。

そして，今回の研究での描画体験との関連が伺えず，それらによってうまく基礎づけられないような諸テキストの解釈仮説（「プロの歌手」「感情的に拒否された経験」等）が一部見られたことも

指摘しておきたい。また逆に，描画をなぞって省察された体験の中でも，多数の実を描く時の義務感や，一つだけ描いた実に対する個人的な思い入れの感覚，あるいは枝に実をつけるときの結実感の強調などに関しては，それらをよく反映するような解釈仮説の記述を諸テキストから読み取ることができなかった。こういったことについては，描画体験が筆者一個人のものであることの限界や，「実」教示の問題との関連性，他の要素によって解釈仮説が根拠づけられる可能性，もしくはそもそも解釈仮説が（少なくとも本邦においては）妥当でないかもしれないこと，等が考えられる。問題で述べた通り，諸テキストの解釈仮説を絶対視せず批判的に吟味しながら新たな知見を加えていくことを念頭に置いて，さらに今後検討を重ねていく必要があるであろう。

Ⅳ　おわりに・続報について

ここまで実の描画体験の省察と諸テキストの実の解釈仮説について述べ，その関連性について検討した。続報『描画体験から考えるバウムテストの実の解釈の理論的基礎づけと教示（2)』では，日本におけるバウムテスト（あるいは樹木画テスト）の先行研究（調査・事例研究等）から実に関する知見を概観し，それらをまとめて，本稿の論考と照らし合わせながらさらに考察を進める。そして，バウムテストにおいて実を描くことや，「実のなる木」という教示を行うことの意味合いについても検討を加える。

〈付記〉

本論文は，日本描画テスト・描画療法学会第32回大会での発表内容に加筆・修正を行ったものである。

〈注〉

1）Koch はインドや他のアジア圏の伝承・神話・宗教に関連した象徴ついても述べているが，日本を含む東アジアの文化への言及は少ない。

2）例えば，鶴田（2007）は日本神話からバウムのコスモロジーに関する考察を行っており，そのような研究は日本におけるバウム（樹木）の象徴性を考えていく際に必要となってくるであろう。

3）筆者はこれまで「実のなる木」という教示でバウムテストを実施してきたため，本研究ではまず「実」教示をベースに論考を進めることにした。

4）実から描き始めるパターンは，佐渡ら（2012）によれば2％程度とごく僅かである。

5）これ以降，バウムの図の例は筆者が幾つかの作品を基に典型例として描き直したものである。

6）このように列記すると，結局問題で述べた“意味のリスト化”となることが分かる。しかし本研究では，このような一覧を示すに到った描画体験とのつながりを，できるだけ説明してきたつもりである。

7）Koch（1957/2010）では，これが子どもにおいての実の解釈と読めるが，その後で実は「子どもの場合人に譲ること等の徴候」とも記している。

文献

阿部惠一郎（2013）．バウムテストの読み方 ―― 象徴から記号へ．金剛出版．

Bolander, K.（1977）．*Assessing Personality Through Tree Drawing*. Basic Books. 高橋依子（訳）(1999)．樹木画によるパーソナリティの理解．ナカニシヤ出版．

石井雄吉・藤元祥子（2017）．樹木画テストにおける教示方法の違いが実の出現に及ぼす影響．心理臨床学研究，**35**，422−426.

Koch, K.（1957）．*Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel*. 3. Auflage. Bern: Hans Huber. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男（訳）(2010)．バウムテスト［第3版］―― 心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究．誠信書房．

小海宏之（2020）．バウムテストの教示における課題．花園大学社会福祉学部研究紀要，**28**，45

−54.

中村延江（2017）．バウムテスト・キット　マニュアル用作品集．千葉テストセンター．

中島ナオミ（2016）．バウムテストを読み解く ―― 発達的側面を中心に．誠信書房．

奥田　亮（2005a）．本研究のねらい．山中康裕・皆藤　章・角野善宏（編）バウムの心理臨床．創元社，pp. 144−151.

奥田　亮（2005b）．幹先端処理において体験されうること ―― 幹先端が描き手に何を引き起こすか．山中康裕・皆藤　章・角野善宏（編）バウムの心理臨床．創元社，pp. 182−197.

奥田　亮（2019a）．描画体験から考えるバウムテストの幹の解釈に関する理論的基礎づけ．心理臨床学研究，**37**，363−373.

奥田　亮（2019b）．100 枚の日誌的バウム描画に関する考察．大阪樟蔭女子大学研究紀要，**9**，101−110.

奥田　亮（2020）．描画体験に基づくバウムテストの包冠線と枝の解釈仮説の理論的基礎づけ．大阪樟蔭女子大学研究紀要，**10**，23−34.

奥田　亮（2022）．描画体験によるバウムテストの根と地面の解釈仮説の理論的基礎づけ．大阪樟蔭女子大学大学院臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要，**16**，17−27.

佐渡忠洋・鈴木　壮・田中生雅・山本眞由美（2012）．バウムの描画プロセスに関する研究 ―― バウムはどこから描かれ，幹はどのように構成されるのか．臨床心理身体運動学研究，**14**，59-68.

Schachtel, E, G.（1966）．*Experimental Foundations of Rorschach's test*. Basic Books, New York. 空井健三・上芝功博（訳）（1975）．ロールシャッハ・テストの体験的基礎．みすず書房．

Stora, R.（1975）．*LE TEST DU DESSIN D'ARBRE*. Jean−pierre delarge, Paris. 阿部惠一郎（訳）（2011）．バウムテスト研究．みすず書房．

高橋雅春・高橋依子（2010）．樹木画テスト．北大路書房．

鶴田英也（2007）．バウムのコスモロジー② ―― 根の国再考．梅花女子大学現代人間学部紀要，**4**，67−73.